國學院大學学術情報リポジトリ

道行の挽歌史：
万葉集巻三理願挽歌の「晩闇跡」に及ぶ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 居駒, 永幸, Ikoma, Nagayuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000041

道行の挽歌史
―万葉集巻三理願挽歌の「晩闇跡」に及ぶ―

居駒永幸

はじめに

ここにいう挽歌の道行とは、死者が他界へ去っていく表現のことを指している。道行の用語は、『万葉集』巻十三の挽歌、三三三五番歌の、

玉鉾の　道行き人は　あしひきの　山行き野行き　にはたづみ　川行き渡り……

によるのであるが、その道行の描写は万葉挽歌の特徴的な表現と見られ、挽歌を成り立たせている構造にもなっている。

本稿は、万葉挽歌の成立と表現史について、この道行構造から明らかにしていくことを目的とするが、その過程で問題となるのが巻三・四六〇番の理願挽歌である。この長歌は急逝した尼理願が佐保川を渡って去っていく様子を描写するが、その道行を表現する「晩闇跡」の訓には異説がある。すなわち、ユフヤミトに対するクレクレトである。両訓の違いは本歌の解釈において決して小さくない。

筆者はかつて万葉歌のクレクレトについて論じ、理願挽歌に

も触れたことがあるのだが[1]、その際十分に検討を深めるには至らなかった。そこで、あらためて道行構造の観点から「晩闇跡」の訓読を取り上げ、理願挽歌の解釈にも言及したいと思う。

一、挽歌の道行表現

死者自らが他界へ去って行く道行の描写は、それを示唆する表現も含めると、天智挽歌をはじめとして万葉歌に次の諸例を見る。しかし、死者の道行は『古事記』の倭建命の御葬に先例があり、『日本書紀』所載の建王を悼む斉明歌もまたそこに加えるべき例であるから、記紀歌謡から万葉歌へという流れの中で、以下、道行表現を見ていくことにする。なお、括弧内は歌番号と作者名、無名は作者未詳歌である。

(1)浅小竹原　腰なづむ　空は行かず　足よ行くな
（記三五、倭建命の后と御子たち）

(2)水門の潮の下り海下り後もくれに（倶例尼）置きてか行かむ
（紀一二〇、斉明天皇）

(3)かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊まりに標結はましを
（万2・一五一、額田王）

(4)しきたへの袖交へし君玉垂の越智野過ぎ行くまたも逢はめやも（一に云ふ、「越智野に過ぎぬ」）
（万2・一九五、柿本人麻呂）

(5)……かぎろひの　もゆる荒野に　白たへの　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入日なす　隠りにしかば……
（万2・二一〇、柿本人麻呂）

(6)楽浪の志賀津の児らが（一に云ふ、「志賀の津の児が」）罷り道の川瀬の道を見ればさぶしも
（万2・二一八、柿本人麻呂）

(7)常知らぬ道の長手をくれくれと（久礼々々等）いかにか行かむ糧はなしに（一に云ふ、「干飯はなしに」）
（万5・八八八、山上憶良）

(8)……佐保川を　朝川渡り　春日野を　そがひに見つつ　あしひきの　山辺をさして　晩闇跡　隠りましぬれ……
（万3・四六〇、大伴坂上郎女）

(9)……露霜の　消ぬるがごとく　あしひきの　山道をさして　入日なす　隠りにしかば……
（万3・四六六、大伴家持）

(10)……言問はぬ　ものにはあれど　我妹子が　入りにし山を　よすかとぞ思ふ
（万3・四八一、高橋朝臣）

⑾秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど来まさず　（万7・一四〇九）

⑿……汝が恋ふる　愛し夫は……この山辺から（或本に云ふ、「その山辺」）　ぬばたまの　黒馬に乗りて　川の瀬を　七瀬渡りて　うらぶれて　夫は逢ひきと……　（万13・三三〇三）

⒀玉鉾の　道行き人は　あしひきの　山行き野行き　にはたづみ　川行き渡り　いさなとり　海道に出でて……とゐ波の　ささふる道を……直渡りけむ　（万13・三三三五）

⒁玉鉾の　道に出で立ち　あしひきの　野行き山行き　にはたづみ　川行き渡り　いさなとり　海路に出でて……とゐ波の　恐き海を　直渡りけむ　（万13・三三三九、調使首）

⒂沖つ国うしはく君が塗り屋形丹塗りの屋形神の門渡る　（万16・三八八八）

(1)とそれに続く二首は倭建命の死後の歌である。『古事記』はその場面を次のように記述する。

化二八尋白智鳥一、翔レ天而、向レ浜飛行。智字以レ音。

「八尋白智鳥」は他界へと飛び去る倭建命の魂の姿で、三首の歌は后と御子たちがそれを追い行く時にうたったとする。倭建命の魂が浅小竹原・海処・磯という境界の場所を越えて他界へと去って行くことをうたうのがそれらの歌の道行である。[2] 死者とそれを追い行く生者の道行がこの葬歌群において重なり合うのである。挽歌の構造がすでにそこに胚胎しているのだが、ここでは(1)が万葉挽歌につながっていく道行表現の嚆矢であることを確認しておく。

(2)は斉明紀四年十月、天皇が紀の湯行幸の折に、その年に薨去した孫の建王を思い出し、傷み悲しんで口ずさんだ歌とする。すぐ前の歌にある「山越えて海渡るとも」（紀一一九）とともに、「水門の潮の下り海下り」を死者自身の道行、すなわち死者の側から詠まれた「死者の歌」とする指摘がある。[3] しかし、『日本書紀』の散文叙述では斉明天皇の作であって紛れもなく生者の側の歌である。このような主体の転換はなぜ起こるのかという問題が生じる。少し先取りした言い方になるが、山海をたどって海彼他界に去る死者とそれに別れを告げる生者の道行の重なりがこれらの歌の道行表現になっているのではないかと予想される。

(3)は天智挽歌群の大殯の歌で、近江の海に停泊した「大御

船」を詠んでいるから、ここには崩御した天智天皇が船で沖へ向かい、他界へ去ったという理解がある。次の歌にも「大御船」（2・一五二）がうたわれ、さらに続く歌の「いさなとり近江の海を……夫の思ふ鳥立つ」（2・一五三）も、近江の海から旅立っていく他界への道行を示唆する表現になっている。

⑷は河島皇子の葬りにうたわれた長歌の反歌で、長歌の「……けだしくも　逢ふやと思ひて（一に云ふ、「君も逢ふやと」）……玉垂れの　越智の大野の……旅寝かもする　逢はぬ君故」（2・一九四）と照応する。左注に「越智野に葬る時」とあるから、その地に埋葬されたわけだが、埋葬ならば一云の「越智野に過ぎぬ」の方がよい。それに対して、反歌の「越智野過ぎ行く」は越智野を通過して行く意であって、埋葬の事実をうたうのではなく、亡夫が越智野を過ぎて他界へ去って行く道行表現と見なければならない。

⑸は妻が死んだ時に「泣血哀慟」して詠んだ柿本人麻呂の挽歌である。これは第二長歌で、一見荒野への埋葬のように読み取れるが、天領巾に身を包んで入日のように隠れたというのは写実的ではない。領巾は「天飛ぶや領巾」（8・一五二〇）とあるように飛翔の呪具と考えられており、これはむしろ、亡妻が他界へ赴く道行の象徴的な表現と見るべきである。

⑹は吉備津采女が死んだ時の長歌に添えた反歌で、「罷り道の川瀬の道」が道行表現である。志賀津の児らは吉備津采女の言い換えと見ておくが、長歌に「時ならず過ぎにし児ら」（2・二一七）とあるのは采女の自殺を暗示しており、短歌は送葬の行列の道行を表現しているのではなく、また入水という現実をうたうのでもなく、他界への罷り道は⑻や⒁～⒁にあるように川瀬を渡って行く道でもあったのである。

以上、柿本人麻呂の作になる⑷～⑹は成立時期がわからないので、巻二の配列に従った。しかし、いずれも持統・文武朝の歌であることに疑いはなく、作者記名歌ではここまでが文武朝以前の歌である。

⑺は天平三（七三一）年、肥後国からの上京中に十八歳で病死した大伴君熊凝を詠んだ山上憶良の挽歌で、熊凝の立場になって詠む点に特色がある。「道の長手をくれくれといかにか行かむ」は麻田陽春がやはり熊凝を主体として詠んだ「道の長手をおほほしく今日や過ぎなむ」（5・八八四）を承けるものだが、陽春の歌と決定的に異なるのは憶良歌が「常知らぬ道」、すなわち熊凝自身の冥界への道行をうたっている点である。ここに、集中二例しかない「くれくれと」が用いられるのは注目される。注釈の多くはこの語を暗い気持ちなど心情表現として

解するが、なお検討を要する。

(8)ではきわめて具体的な他界への道行が描写される。これは天平七（七三五）年、大伴家に寄宿していた新羅の尼理願の死を悲嘆した大伴坂上郎女の挽歌である。理願死去の時、家人が不在で郎女が葬儀を取り仕切り、柩の送葬を終えて作歌したと左注は記す。それによれば、朝、佐保川を渡り、春日野を見ながら山辺に隠れ行くとする情景は、柩を運ぶ野辺送りの葬列と見るに疑いはない。しかし、これは葬列の道行を詠んだ実景の表現かどうか疑問がある。死者理願の視点で理願を主体とした道行として描写されているからである。しかも冒頭に述べた、この部分の「晩闇跡」の訓読に関わって挽歌の道行構造が問題となる。なお、この点については(7)の課題とともに後述するところに譲る。

(9)の道行表現はその類句関係から(8)の影響下に成ったと見てよい。この歌は(8)の直後に大伴家持の亡妾挽歌群の長歌として記され、作歌年次も天平十一（七三九）年と(8)に近接する。同時に「入日なす隠りにしかば」は人麻呂の(5)と同句であることから、その影響も見逃せない。「山道をさして」の道行表現も人麻呂挽歌に出てくる「山道」とつながる。そこにあるのは山中他界観である。(10)の「我妹子が入りにし山」も(5)の発想と表現の影響下にある道行表現である。秋山にうらぶれて入って行った妻をうたう(11)も山中他界観による。

(12)は挽歌の部立に入っていない。相聞である。それにもかかわらず、ここに加えたのは挽歌の道行表現と見なされるからである。[4] 山辺から黒馬に乗っていくつもの川瀬をうらぶれて渡って行く夫、これは死者の道行のきわめて具体的な描写である。道行表現の様式を示す貴重な例と言ってもよい。

(13)は巻十三挽歌に「右九首」と一括された最初の長歌。道行人は山を行き野を行き川を渡り、海道に出て海彼に渡り去ったという死者の道行表現である。この第一長歌に、海辺に伏せる行路死者を詠んだ第二長歌を結合させた形の第三長歌が(14)で、調使首が備後国神島で海辺の死者を見て詠んだと題詞にある。従って、(14)にも(13)とほぼ同様の道行表現が見られ、秋間俊夫氏は(2)や(15)も含めて「死者が海坂（うなさか）を渡ってヨミの国へ行くことを歌った歌」[5]としている。その(15)は「怕ろしき物の歌三首」のひとつで、死者が海の彼方の国に船で連れて行かれることをうたっており、そこに「神の門渡る」という道行表現が見られる。したがって(2)や(13)～(15)は海彼他界への道行ということになる。

以上、記紀万葉の葬歌から挽歌には死者が他界へ去って行く

道行がうたわれることを確かめてきた。その道行表現は倭建命の葬歌(1)から、作者記名歌による限り（調使首の(14)は作歌年次不明）、伊藤博『萬葉集釋注』が天平十六年と推定する高橋朝臣の挽歌(10)まで続く。まさに道行の挽歌史という様相を呈しているわけだが、それではなぜ死者の道行がうたわれるのか。それが挽歌表現を成り立たせているひとつの構造であることは間違いない。

これまで挽歌の道行をその表現史から見ることによって少しずつ明らかになってきたように、挽歌の道行には主体の問題が存在する。つまり、他界に去る死者と別れを告げる生者のあいだで主体が移動したり混在したりする構造があり、(2)で触れた死者の歌に対する先の問題提起はこの構造と深く関わると考えられる。

二、挽歌と道行構造

倭建命の(1)などの葬歌とその物語は、この構造から考えていくことによってはじめて読み解けるであろう。

又、入二其海塩一而、那豆美此三字以レ音。行時、歌曰、

海処行けば　腰なづむ　大河原の　植ゑ草　海処はいさよふ　（記三六）

これは第三首の葬歌で、散文では「なづみ」が一字一音で表記され、必ずその和語で読む記述になっている。その意図には留意すべきである。第一歌の「なづきの田」の「なづ」は「なづむ」の「なづ」で、足がとられる泥田の意であろう。第二・三歌の「腰なづむ」は腰が進まない意。第四歌の「磯伝ふ」は岩場の歩行の困難さを意味する。全体を通して、難渋する意の「なづむ」とその状況を表す語がキーワードになっていることを示す。四首の葬歌は、亡き倭建命が行き難い境界の場所をたどって他界へ去って行ったとうたっているのである。それを成り立たせているのが「境界の場所＋なづむ」という道行構造である。[6] そこには天上と山中と海彼の他界が重層しているように見える。

この道行構造は、前に触れたように主体の問題が関わっている。歌だけ見ると、確かに境界の場所を越えて他界へ行く死者自身の言葉とも読み取れる。例えば(1)の「足よ行くな」は他界へ去っていく倭建命の道行にも見えるからである。それを指摘したのは古橋信孝氏で、これらの歌を死者の道行の謡とし、「后等が死者の側に立ってうたった」と述べる。[7] しかし、『古事

記』の散文では紛れもなく后と御子たちが倭建命の魂を追い行く歌である。

このような主体の流動性はなぜ起こるのか。それは「境界の場所＋なづむ」の道行構造が他界へ去る死者と追い行く生者において重なり合うからだと考えられる。道行は死者の他界への鎮まりをうたうのであって、死者の鎮魂と生者の慰撫はそこにおいて一体なのである。他界との境界は難渋しながら行く場所で、「境界の場所＋なづむ」は葬歌と挽歌に死者の他界への鎮まりという構造をもたらしている。

いま述べた道行構造を、以下、万葉挽歌に確かめていきたい。厳密には挽歌の呼称はないが、(2)の建王悲傷歌から見ていく。歌の表現を見ると、第一歌の「山越えて海渡るとも」、第二歌の「潮の下り海下り」の主体は死者建王と斉明天皇のいずれとも読み取れる。しかし、第三歌では「吾が若き子を置きてか行かむ」（紀一二一）とあり、散文に天皇の歌と明記されるから、主体の流動性はここでも起こっている。前掲の秋間論文では、死者の歌が祭式の場から離れて斉明天皇に結びつく過程で整理が加えられたことを想定している[8]。

しかし、根拠があるなら別だが、安易に散文から歌を引きはがさない方がよい。まずは『日本書紀』の本文において読み解くべきである。それによれば、斉明天皇が船で海を渡って紀の湯に行く時に詠んだ歌であって、海路にある斉明天皇が海彼の他界に去り行く建王の魂を送り鎮める歌だと理解できる。死者と生者の道行が重なり合うという構造である。主体の流動性はこの道行構造から起こってくるのである。

生者の側が死者を送り鎮めると言っても、他界へ行くわけではない。境界の場所まで行ってそこで別れを告げることになる。それが(1)で見た「境界の場所＋なづむ」の表現であった。(2)では「海下り後もくれに」である。「海下り」という海坂は境界の場所であるがゆえに、「後もくれに置きて行」くのである。そうすると、「後もくれに」に対する「あとのことが心配で心が暗く沈む意[9]」という解釈は見直さなければならない。(1)で見たように、死者も生者も境界の場所において行きなずみながら別れるのである。したがって、「くれに」は暗い気持ちという意の心情語ではなく、難渋する様を表す語と見るのが古代的な理解であろう。すなわち、「建王（の魂）を海坂の先の他界に置いて、難渋しながら海路を行く意[10]」である。

この道行構造は万葉挽歌にどのように見えるだろうか。天上他界は日並皇子挽歌などきわめて限定的なのでいまは除外するとして、前掲の例で言えば、仏教の冥界と見られる(7)以外の(3)

～⑿が山中他界への道行である。⑶は後の歌に「山に標結ふ」（2・一五四）が出てくるから、「大御船」とはあるが山中他界への鎮まりをイメージしていると見ておく。

⑷の「越智野」、⑸では「荒野」が境界の場所である。死者はその境界を越えて他界へと去って行くのであって、生者はその場所で別れを告げる。つまり、死を確認する。死者の魂がこの世に留まることへの恐れをより強く認識していたのが古代の精神世界だと考えられるから、挽歌はその認識の上に成立する。それゆえ挽歌には道行構造が詠み込まれることになる。それを示すのが⑷の本文「越智野過ぎ行く」で、一云の「過ぎぬ」では明確にし得なかった道行構造をよりはっきりさせたのが⑷本文ということになる。越智野という境界の場所で死者に別れを告げ、死を確認する。逢えないとうたうことがそれを意味している。

西郷信綱氏は「逢ふ」の語の連続に「感情の流れ」[11]を指摘するが、あまり「感情」から読むことを強調しない方がよかろう。それはあくまで死者の他界への鎮まりを意図する表現だからである。それが「感情」に見えるということにすぎない。

また前述したように、それを葬地の表現と実体化してはならない。⑸を見ると、そのあたりの事情がさらにはっきりする。それは、「荒野」に隠れたとしながら、羽易の山に妻はいると他人が教える点である。「荒野」という境界の場所を越えて妻は山中他界に鎮まったのであって、やはりここでも亡き妻とは逢えなかったと結ぶ。そのようにうたうことが他界への鎮まりを示す構造になっているのである。

⑹の「罷り道の川瀬の道」も山中他界への道行と見てよい。稲岡耕二氏は『万葉代匠記』精撰本の「川瀬ノ道ハ、身ヲ投ムトテ行シヲ云ナルヘシ」を支持して、「身を投げて溺れ死んだ所」と解する。[12]しかしこれは、境界である川瀬を渡って行く道、すなわち山中他界への移動をうたう道行構造と見るべきで、実際の入水の地を詠んだのではない。前に例を示したように、川渡りの道は他界への移動を示す構造としてある。

「山道」をうたったのも柿本人麻呂である。

衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし
（2・二一二）

泣血哀慟歌（2・二一〇）の反歌である。妻が「荒野」から山中他界に鎮まったことを確かめ、境界としての「山道」を行く歌である。⑻～⑿の道行構造は泣血哀慟歌の影響を受けている

と考えられる。いずれにも死者が「山辺」「山道」をたどって山中に隠れるという構造が見られるからである。⑽「我妹子が入りにし山」、⑾「秋山の……入りにし妹」はその直接的表現であるが、人麻呂の⑸はそれを山に沈む夕日に喩える。その表現が規範となって⑻に「晩闇跡隠りましぬれ」、⑼に「入日なす隠りにしかば」の道行構造が詠み込まれているのは明らかである。

ところが、⑾⑿では山中他界に移動する死者を「うらぶれて」と描写する点が注目される。これは人麻呂がうたわなかった表現である。⑴や⑸に境界の場所で「なづむ」様子がうたわれていたが、後期万葉になると他界へ行く死者の悄然とした姿が詠まれるのである。[13] これは死者の表情や姿を詠むという道行構造への新たな視点である。

山中他界観に基づくこの構造は、死者（の魂）が海彼他界へ渡って行くことをうたう⒀～⒂にも見られる。というより、⒀などは歌全体が道行構造から成っていると言ってよい。⒁の題詞には神島の浜の屍を見て作るとあるから、海浜の行路死人を詠んだものであり、横死者の鎮魂を強く意識する歌になっている。「恐き海を直渡りけむ」「神の門渡る」で結ぶ道行構造は、死者が海彼他界へ鎮まることをうたっており、それがまた家族への慰めにもなると考えられたのである。この道行は挽歌として成立するための構造をよく示していると言える。

このように見てくると、⑺の異質性が際立つ。山中でも海彼でもなく、仏教的冥界へと向かう「道の長手」がうたわれているからである。「糧はなしに」は「大般涅槃経巻十二、聖行品」の「夫死者於嶮難処無有資糧」を典拠とすることが本田義憲氏によって指摘されている。[14] おそらくその通りであろう。その道行が「くれくれといかにか行かむ」と描写される点は注目される。仏教的冥界への道行を表すのにふさわしい和語として「くれくれと」が選ばれたと見てよい。この語は⑵「くれに」と関連し、他界への道行の表現としてあったものと考えられる。

以上のことから、万葉挽歌は他界への鎮まりという道行構造をもつことで挽歌たりえたと言える。その視点は、葬歌と挽歌のあいだに発想の断層があり、中国文学の影響下にはじめて挽歌が成立したとする従来の見方に、[15] また別の方向性を与えるであろう。道行構造においては葬歌から挽歌へとつながっているのである。

三、理願挽歌の「晩闇跡」

道行の挽歌史から見ると、⑸泣血哀慟歌を下敷きにして⑻理願挽歌の道行表現が詠まれたという関係でとらえられる。しかし、⑻は単なる⑸の模倣とは言えない。⑸の象徴的なうたい方に対して⑻の写実的な道行表現は、後期万葉の挽歌における一つの達成を示しているからである。それでは、この表現はいかにして獲得されたのか。このような視点において問題となるのが「晩闇跡」の訓読である。

この表記は諸本に異同がなく、訓読においては西本願寺本にユフヤミトの傍訓があり、他にユフクレトとクラヤミトの訓が見られる。広瀬本では「晩闇」の右訓ユフクレを見消にしてその傍にユフヤミを書き、「晩」にクラの左訓を施す。三訓を示し、ユフヤミトを本文とすることがわかる。

注釈書では契沖『萬葉代匠記』精撰本がユフヤミトと訓み、「夕ヤミニ物ノ見エヌ如ク隠行ナリ」とする。一方、本居宣長『萬葉集玉の小琴』はクラヤミトとし、「こは地下に葬る意をもて云也」と説く。しかし、クラヤミの語は山田孝雄『萬葉集講義』が本集に確例がないとするだけでなく、埋葬の実態に即した表現とは見られないことからも妥当性を欠く。もう一つの旧訓ユフヤミトの方は現在ほぼ定説になっていると言ってよいが、武田祐吉『萬葉集全註釋』はその訓に従うものの「晩闇の如く」と解するのは無理とし、「トは、と共にの意」で、「夕方になって、火葬したので、この句がある」と述べる。

それに対して澤瀉久孝『萬葉集注釋』はトを「と共に」とは解せないとし、「石床と川の氷凝り」（1・七九）などの例を挙げてそこに下を修飾する意を認め、「これは折から迫る夕闇の、たどたどしくおぼつかない如くに、はかなく隠れてしまわれたので、の意」と解した。ただ、この解釈では「夕闇の」と「たどたどしくおぼつかない如くに」の関係がわかりにくい。「夕闇のように」からおぼつかない歩行の形容は出てこないからである。伊藤『釋注』も同様に、語釈では「夕闇のごとくに」とし、「夕闇に消え入るように隠れてしまわれた」という口語訳を示す。だが、ここでも夕闇が形容するところと「夕闇に消え入るように」とのあいだに齟齬が生じている。

このような中で、古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）はクレクレトの新訓を示し[16]、その後中西進『万葉集』（講談社文庫）、最近では多田一臣『万葉集全解』がその訓を採用している。土屋文明『萬葉集私注』はクレクレトの訓読について次のように述べる。

路上たどきない進行を表現する語と見える。「晩闇」はいづれもクレと訓み習はした字である。舊訓の如くユフヤミトとしたり又はクラヤミトとしたのでは意をなさない。

これは(7)や「くれくれとひとりそ我が来る」（13・三二三七）に基づく訓読であるが、その前提にはユフヤミトやクラヤミトから「隠りましぬれ」への続き方が意味的に成り立たないという難点があった。「隠る」に係る語としては隠れる人の歩行状態を表すのがふさわしいからである。「とぼとぼと物さびしげに隠れてしまわれた」という土屋『私注』の大意は、そのつながりを意識するものである。

それでは「晩闇跡」はクレクレトと訓読できるのか。「晩」は「晩家流（クレニケル）」（1・五）「晩去（クレヌル）」（2・二〇七）「明晩（アケクレ）」（4・五〇九）など、動詞にも名詞にもクレと訓む例が多く見られる。「闇」も「明闇（アケクレ）」（10・二一二九）「日之闇者（ヒノクレヌレバ）」（13・三二五八）などにクレの訓字としての表記が認められる。従って、クレクレという和語の訓字表記として、クレと訓む二種類の用字「晩」「闇」を重ねて書いたと解することができる。

次にクレクレトの語義であるが、前掲の土屋『私注』の他、古典文学大系『万葉集』の「とぼとぼと。心細くたよりなく歩むさま」の頭注と「心細くも」という大意、中西『万葉集』の「死出の形容」で「心もくらく」とする口訳が見られる。ただ、この場合、ユフヤミトと同様、語義において歩行状態か心情かという点の曖昧さが問題となる。やはり、歩行状態と心情では意味が異なるからである。この点、多田『全解』が「死者の形容」として「闇路をたどるように」という現代語訳を示すのは、直接には(7)の用例に基づくと見られるが、この語を死者の歩行として解釈しようとするものである。

前に触れたように、クレクレトは(7)の他にもう一例出てくるので、それも含めて統一的に語義を検討する必要がある。

或本の歌に曰く

あをによし　奈良山過ぎて　もののふの　宇治川渡り　娘子らに　逢坂山に　手向草　幣取り置きて　我妹子に　近江の海の　沖つ波　来寄る浜辺を　くれくれと（久礼久礼登）　ひとりそ我が来る　妹が目を欲り　（13・三二三七）

土屋『私注』は「旅の道々を謠った民謡」と見ている。この歌では地名列挙の道行に関心が向けられ、浜辺を来る「我」の

形容としてクレクレトの語がある。新編全集『萬葉集』（小学館）に「暗い心理状態を表す語。不安な気持ちで不馴れな道を行くことを示す」とあるように、暗い気持ちとするのが現在の通説である。この説は、橘千蔭『萬葉集略解』が(7)の注に、本居宣長がクレクレは(2)のクレと同じく「闇き意にておぼつかなきさまなり」とするのを引き、さらに三二三七番歌の注に、(2)を挙げて「後ろも闇にて、あとのことのこゝろもとなくおもはるゝ也」と述べているように、宣長説が最初のようである。[17]

ここに(2)のクレニとの関連を見るのは従うべきであるが、クレクレトを暗い気持ちとする通説には根拠があるのだろうか。前節で触れたように、クレニは境界の場所で難渋する意を表す語である。それを考え合わせると、この歌の「沖つ波来寄る浜辺を」の詞句は注意される。波が寄せる浜辺は通り道として適していない。難路を苦労しながら来る、妻に逢いたい一心で、というのがこの歌の言わんとするところであろう。恋の通い路の苦労をうたう類型に基づくと見てよい。それは通常の交通路ではなく、道なき浜辺なのである。ここに倭建命の葬歌「海処行けば腰なづむ」（記三六）を重ね合わせれば、「境界の場所＋なづむ」という道行構造であることが理解できる。クレクレトはこの「なづむ」様を表す語ということになる。たどたどと難渋しながら、の意である。それで(7)も解釈できるし、(2)のクレニも通じる。

ここでまた(8)の「晩闇跡」にもどる。朝、家を出た亡き理願は、佐保川を渡り、見慣れた春日山を振り返りながら、他界の山へたどたどと隠れて行くとうたう。いくつもの境界を越えて行くのであって、その歩行は難渋し、おぼつかないのである。クレクレトは他界へ隠れるための歩行の様をうたうと言わなければならない。つまり、理願が他界へ鎮まることを言わんとするのであるから、歩行状態を意味するクレクレトの訓読がふさわしい。暗い気持ちという心情語としての理解は、おそらく冥界への道行を表す(7)の印象によるもので、近世以降に定説化していくのである。いずれにしても心情語とする説は甚だ疑問で、古代的な挽歌の道行構造から見れば、死者理願を主体とした他界への道行がクレクレトの語を通して表現されると言ってよい。

最後に、「朝川」に応じてユフヤミ（夕闇）があるとする考え方に対して若干の補足を加えておく。山中に隠れる死者の道行は、(5)「入日なす隠りにしかば」以降、夕刻とするのが万葉歌のうたい方である。それゆえにクレクレの和語を書記する時、夕刻を意味する「晩」「闇」の字を用い、「朝川」に呼応す

る訓字表記で示したと考えられる。

結び

道行の挽歌史を貫くものは、いま論じてきたように、死者の他界への鎮まりをうたうというその一点にあった。あたかも死者自ら歩みを進めて他界に隠れ行くごとくにうたわれる。山中にしろ海彼にしろ、死者はそこに行き鎮まり、生者は送り別れるという事柄をうたうところに挽歌の存在があった。他界への道行を確かめることよって、死者の鎮魂と生者の慰撫が果たされるのである。その意味で、挽歌は叙事的である。小論であえて悲しみとか哀傷の側に立たなかったのは、個人的な感情によって挽歌が成り立っているのではないという見方による。個人的な感情がないと言っているのではなく、挽歌は一つには道行構造によって詠まれると述べてきたのである。

その道行構造から見ると、理願挽歌（3・四六〇）の「晩闇跡」はクレクレトと訓むのがふさわしいし、理願自らたどたどと難渋しながら他界へと隠れ行くのである。クレクレトは山辺をさして境界の場所を越えて行く表現と見なされる。それを暗い気持ちでという心情で解することは妥当でない。あくまでも他界への道行という事柄に関わるからである。

時代は降るが、『梁塵秘抄』に、

花の都を振り捨てて　くれくれ参るは朧けか……
（巻二・二六〇）

甲斐国よりまかり出でて　信濃の御坂をくれくれと　はるばると……
（巻二・三六一）

と出てくる。前者は熊野へ下る死と再生の旅であるし、後者は都へ上る東山道の難所、神坂峠を越える道行を指す。後世、この語には動揺や不安の心象が加わってくるにしても、[18] 根幹には他界や異境へなづみ行く様という語義が厳然としてあり続けると言ってよかろう。

注

（1）「万葉歌の「くれくれと」――境界に関わる表現として――」（上代文学会研究発表、二〇〇六年十一月十九日）

（2）拙稿「境界の場所（上）――ヤマトタケル葬歌の表現の問題として――」（『明治大学教養論集』一九九一年三月、『古代の歌と叙事文芸史』所収）

（3）秋間俊夫「「死者の歌」――斉明天皇の歌謡と遊部――」（『文学』一九七二年三月）

（4）拙稿「死者との出逢い——万葉集巻十三・三三〇三の挽歌的表現構造——」（『明治大学教養論集』一九九〇年三月）
（5）注（3）同論文
（6）注（2）同論文
（7）「王権の発生論　死者のうたと語り」（『物語・差別・天皇制』一九八五年十二月）
（8）注（3）同論文
（9）土橋寛『古代歌謡全注釈・日本書紀編』（一九七六年）
（10）大久間喜一郎・居駒永幸編『日本書紀［歌］全注釈』（二〇〇八年）
（11）『萬葉私記』（一九七〇年）
（12）『萬葉集全注』巻第二（一九八五年）
（13）伊藤博『萬葉集釋注』十一別巻（一九九九年）は、(11)を含む巻七出典不明の歌群を天平期の歌と推定する。(12)については不明である。
（14）「万葉集と死生観・他界観」（『萬葉集講座』第二巻、一九七三年五月）
（15）伊藤博「挽歌の世界」（『解釈と鑑賞』一九七〇年七月、『萬葉集の歌人と作品上』所収）
（16）新日本古典文学大系『萬葉集』（一九九九年）ではユフヤミトの旧訓に戻り、「夕闇とともに隠れてしまわれた」とする。
（17）曽倉岑『萬葉集全注』巻第十三（二〇〇五年）
（18）高橋六二「梁塵秘抄の「くれ〳〵」「くれ〳〵と」という語」（『日本歌謡研究』一九七二年十二月）